

白井明大さんと『ヘリヤ記』を語る

奈良 敏行

詩人の白井明大さんのファンタジー作品『ヘリヤ記Ⅰ《声たち》』のギャラリー展示「小石をひとつ拾うこと」が十一月六日(2024)から二十四日までベールブル喫茶「森の生活者」で開催。十日にギャラリートークがあり、インタビュアーとして参加した。

来場者は十人程度と聞いていたが、二十数人が集まりひしめていた。予定は二時間で、十五分刻みの進行表を作成した。

第一章、展示品の紹介。第二章、白井さんの「ブックリスト」をたどってその著作活動二十年を振り返る。第三章、白井さんの「ひとと仕事」という骨組みで全体構成したので、その中心に位置する詩作品「生きる」を伊民公恵さんが朗読。七分にわたる長い詩だが、朗々とあるいは囁くような情感豊かな朗読で、会場全体が引き込まれた。第四章、『ヘリヤ記』のあらすじ紹介。進行役の奈良が資料を作成し、作品に添えられた「タラン市とその周辺」の地図

を頼りに主人公アムナリウスの移動をたどった。北(下1部)から南(上部)へと場面展開する話なので、途中の出会い、気配を語る箇所を抜き書きして手がかりとした。

アムナリウスは《声たち》と交信することができる。そしてそれは「ノル」「石」と彼の心の内で表象される。《声たち》に触れると、毒消しの「煙葉草」を服用しなければならぬ。アムナリウスはかつて「僧院」で学んだらしい。

《声たち》は空気を歪ませる。南上すると長く市壁がつぶき、風車塔も現れる。それは空間を歪ませる禍を、市(まち)に侵入させない目的でつくられた。なぜかアムナリウスのような赤毛の少年たちが集められ、歪みに侵された土地で小石の除去作業をする。これがテーマの「小石をひとつ拾うこと」の場面だ。モニターで滞在時間の管理をされた作業にいそしむ。第五章、会場との質疑応答。『ヘリヤ記』は全三巻予定の第一巻なので、世界観は拡散しつつ謎の事象が頻出するので、質問はそこに集中した。白井さんは、物語の謎はわからなくてもいいのではないかと言った。それが自分流のファンタジー作法なのだ。回収されないもどかしさが、逆に世界観のふくらみを形成するのだと理解した。白井さんの詩作を大きく飛躍させたのは「生きよう」と生きるほうへ『思潮社2015』だ。作家として大成功したのは『日本の七十二候を楽しむ』旧暦のある暮ら

』KADOKAWAにて増補新装版2020。白井さんは自分の「ひとと仕事」を三期に分ける。一期旧暦への関心。これは過去へと目を向けた時期だ、二期は「現在」を一步一步確認して生きなければならなかった時で、詩という形が救済するように現れた。三期目は「いま・ここ」だが、じつは未来を見つめ始めている。するとファンタジー作品が生まれた。『ヘリヤ記』だ。過去・現在・未来を取り込むハイファンタジーだ。年代記の中、詩篇は告知する。

《そうだけで あるだけで ずっと

いのちが暮らせるように》(エピグラム)

第六章、「小石を拾う」ってどういうことですか、と会場から質問が寄せられる。伏線は回収しないといいながら、白井さんは正面から答えようとした。しかしふと結構を踏み出して語りすぎたのではないかと思った。自分の「生きようと生きるほうへ」を語った。

白井さんは「拾う」という営みにサルトルの存在を重ねた。サルトルの言葉が自分に刺さる、と。本当の樂觀主義とは何か。それは絶望の最中に始まるのではないか。外部に何も期待しない。自分だけを頼りに他人のために尽くす、一人だけでも…。これが『ヘリヤ記』のエッセンスだと言いつつ切った。人間一人にできることは限られている。でも軽んじてはいけない。

鳥取で先日ある渡り鳥に出合った。白井さんはいま鳥に関心が向いている。これは鳥取を直指して来たものではない。途中一週間ほど一休みしているだけだ。この気づきは小さな驚きだが、それほど鳥取は豊かなのだと心が震えた。この奇蹟のような自然の豊かさの中で仕事(創作)ができると思ったと語る。

詩は生と結びついたものでありたい。「戦後詩」は思想や理念を言葉に乗せた。屹立した一行に思想が込められた。しかし現状を見たとき「戦後詩」とは何だったのか。思想は「生活」に試される。だから自分の詩は「生活」を題材とする。言葉は生きられねばならない。生きられるものだけを言葉にする。

「生きよう」とするところに平坦な言葉が現れる。「生きようとするほう」は思想に向かう。白井さんの詩はそういうきしみの中に生まれる。

『ヘリヤ記』の事象は置き去りにされる。置き去りにされ、何かが退くところに、「未来」が現れる。しかし《声たち》のささやきの一つ「ノル」、これだけは気になり心残りだった。「森の生活者」の主人の森木さんが、大丈夫「ノル・クッキー」を作ったとみんなのコーヒーカップに添えてくれた。ファンタジーの中の事象は回収されないのではなく、一人一人の心の中に散らばるのだと気づいた。

2024.11.13

(参考)

白井明大『へりや記1』 詩之友社 2024

『生きようとし生きるほうへ』 思潮社 2015

『日本の七十二候を楽しもう』 KADOKAWA 2020